

Title	『義経千本桜』と『平家物語評判秘伝抄』
Sub Title	The relation between Yoshitsune senbon zakura and Heike monogatari hyoban hidden shou
Author	佐谷, 眞木人(Saya, Makito)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2008
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.95, (2008. 12) ,p.199- 212
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	岩松研吉郎教授高宮利行教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00950001-0199">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00950001-0199</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 『義経千本桜』と『平家物語評判秘伝抄』

佐谷 眞木人

はじめに

延享四年（一七四七）十一月に大坂竹本座で初演された浄瑠璃『義経千本桜』は、今日もたびたび上演される傑作である。二代目竹田出雲、三好松洛、並木千柳（宗輔）の合作により、平家滅亡後の世界を『平家物語』『義経記』の内容に拠りながら、独自の趣向で描いている。

この作品が、平知盛、平維盛、平教経という三人の平家の武将が、壇ノ浦合戦の後も実は生きていたという設定を骨格としていることは、既に原道生氏が詳細に説かれたところである。この設定について原氏は、「歴史の常識の逆を行く、奇警な、しかし、伝説としてはよくある形の設定」であると指摘している<sup>1)</sup>。これら三人は劇中で、平知盛は自害、平維盛は出家、平教経は討死しているもので、「正史」が書き換えられることはない。こうして三人が実は生きていたという「秘史」は闇に葬られてしまう。このような「秘史」の形成過程は、浄瑠璃作者による創作に一元的に帰してしまえないものである。というのは、『平家物語』には、浄瑠璃以前にさまざまな別伝が存在し、それらが浄瑠璃の内容に影響を与えていると思われるからである。『義経千本桜』が描く「秘史」は、どのような素材をもとに作られたのであろうか。

この論考では、『平家物語』に関する伝承や批評の展開を検証することで、『義経千本桜』の成立背景の一端を明らかにしたい。

## 一 平維盛生存説をめぐって

問題の三人のうち、まず、平維盛生存説から検討していきたい。覚一本『平家物語』巻十は、平維盛は高野山で出家し、その後、熊野で入水自殺を遂げた」と記している（「横笛」→「維盛出家」）。維盛については、早く中世から生存説話が存在した。『源平盛衰記』巻四十は、「或説には」として、「那智の客僧等」が維盛を哀れんで那智の滝の奥の山中に庵室を作つて隠し置き、その子孫が今も残つて」と記している。<sup>①</sup>

また、『太平記』巻五「大塔宮熊野落事」では、大塔宮護良親王の熊野落ちを描く際に、十津川における戸野兵衛尉の言葉として、「平家ノ嫡孫維盛ト申ケル人モ、我等ガ先祖ヲ憑<sup>タノミ</sup>テ此所（十津川）ニ隠レ、遂ニ源氏ノ世ニ無恙<sup>ツツガナク</sup>候ケルトコソ承候ヘ。」と記している。<sup>②</sup>したがつて、奈良県の十津川村にも維盛伝承が存在したことが知られる。参考までに、寛政三年（一七九二）刊の『大和名所図会』巻六には、十津川莊<sup>いもがせ</sup>五百瀬村（現、十津川村芋瀬）に「宝蔵寺」という、平維盛の建立と伝える寺があること、また、同所に維盛の墓があることを記している。<sup>③</sup>これら『源平盛衰記』や『太平記』の記事により、室町期には既に、平維盛の生存説話が成立していたことがわかる。このように説話が熊野と十津川の二箇所に見えることについて、鈴木宗朔氏は、熊野の維盛伝説が南北朝期に十津川まで伝来し、『太平記』がそれを取り入れたものと推定している。<sup>④</sup>

それでは、近世に入ると、この生存説話はどのように展開するのであろうか。鈴木氏の論考によれば、有田郡山保田

庄上湯川村（現、清水町）の小松氏が代々「小松弥助」を名乗り、維盛の子孫として認められていた。『紀伊統風土記』によれば、元和五年（一六一九）に紀州藩主として着任した徳川頼宣が、小松弥助を地侍として処遇している。

また、文献上は元禄二年（一六八九）刊の『参考太平記』巻五に、維盛の子孫が紀州に現存し、「小松弥助」を名乗っているという記事が見える。したがって、この頃には、小松弥助の名は広く知られていたものと思われる。『義経千本桜』では、すし屋に匿われた維盛が「弥助」と名を改めている。作中では「いよいよ助くる」の意という説明がなされているが、この名は作者による創作ではなく、現存した「小松弥助」の名を参考にしたものであろう。また、鈴木氏は『明良洪範』続編巻八「小松維盛の後裔」の項に、維盛が熊野色川の土豪、清水清左衛門に匿われ、その婿となったとする記事のあることを指摘している。これもまた、維盛がすし屋の弥左衛門に匿われて、娘のお里から思いを寄せられるという『義経千本桜』の筋に反映していよう。

さて、このような維盛生存説をさらに大きく展開したのが『平家物語評判秘伝抄』（以下『秘伝抄』）である。『秘伝抄』は『平家物語』の注釈書で、十二巻二十四冊。慶安三年（一六五〇）の刊記のある板本が存在するので、成立はそれ以前である。作者は諸説あるが詳らかでない。『平家物語』の本文を抄出し、著者による批評（評曰）及び別伝（伝曰）を付加している。別伝の典拠は明示されないが、『吾妻鏡』に拠る箇所があることが、堀竹忠晃氏によって指摘されている。本書の内容について杉本圭三郎氏は『平家物語』を文学作品として評論するものではなく、叙述されている人物や人物の行動・事件など、作品に表現されている事実に対しての批評である。人物や人物の行動に対しては、儒教的・仏教的倫理観にたつてこれを批判し、道学的見地からそれぞれ詳細に論じて毀誉褒貶している。事件、とくに戦闘などについては、兵法の立場からの評論を加えて、その優劣を明らかにしている。全体にわたつて、強調しているのは道義

であり、それを批判の軸とする、『平家物語』の人物論・政道論・軍略論である」と指摘している。<sup>(12)</sup>

この『秘伝抄』において、維盛の入水がどのように記述されているかを、以下に見ていきたい。まず、「評曰」として、作者は維盛の入水を以下のように評価している。

これもりの出家は、とても遁ぬ世と成給へば、さのみ感心すべきにあらず。石童丸が出家は、重景が勇によれり。故に三人の出家の其志の軽重を云時は、重景を重しとすべし。又惟盛の出家せられける事、敵陣に向て討死し給たるより、当分廉からぬふるまひたるべし。されども、其志いかおもはれけん。此度の有様にては、とても平氏の滅亡にして、運をひらく事難に極時は、錦を着て泥中にふし、石を懷て測に沈がごとくにして、よしなき徒と一所に、いたづらに空なり給はんより、暫其身をかくして、時をまち、運をひらかん計謀を廻し給ふ志宜しからんか。縦一生其志達事あたはずと云とも、其思処真なる時は、必終には其心根世に踞るもの也。惟盛尤平家の一門をうちすて、退給ふ処をみる時は、是不義不勇なるに似たり。されども若此惟盛、此時退て、其身を隠、時に臨て大功を達し給ふ時は、却て此ときの不義不勇と存たるも、皆世の誤と成ぬべし。然ば惟盛の志一つによつて善悪の二義有べし。されども此書には、終に熊野の沖にて入水し給ひたりとあれば、是宜しからざる出家なるべし。

右によれば、維盛の出家は敵と戦うことから逃れたものであり、潔くない行いであるという。しかし、傍線部に見えるように、明らかに味方の形勢が不利な時に、潔く戦つて討死するよりも、むしろその場を逃れて後日の再興を期したほうがよい、という判断も成り立ちうる。その場合には、「一時は「不義不勇」に見えた行いも、世の誤りとなつて面目

を施すであらう。このような、死んだと見せかけてその場を逃れ、時期を見て再興を期すという計略は、『義経千本桜』全体の構想と深く関わっている。この問題については、後に知盛、教経についても詳しく見ていきたい。

また、右の評は最後のところで、「此書には、終に熊野の沖にて入水し給ひたりとあれば、是宜しからざる出家なるべし」とあつて、維盛の出家は評価されていないものの、入水説を記す『平家物語』以外に、別の伝承があることが暗示されている。そこで次に、「傳曰」を見ていきたい。これは維盛に関する「別伝」であるが、以下のように記している。

小松大臣殿、御臨終の砌、惟盛を御枕の近ふへ召れ、あたりの人を退られ、重景一人斗召て仰られけるは、平氏禪門の驕によつて、天下悉當家を背、万人乱を好事、十ヶ年以來甚といへども、重盛智謀を廻し、今に世をたもてり。されども一門の者共、悉私欲を貪て、弥禪門を驕らしめ、却て重盛に讐をたくむもの多し。されども吾天に徳をなせり。何ぞあへて是をうれふべけん。只吾徳の足ざる事を愁。然といへ共、運命既に尽て、此時空く成べし。しからば必天下の大乱三年を出べからず。終汝等も帝都を去、西海に流浪すべし。然らば汝は智をめぐらし、紀伊国に兼て拵たる所有。此所へし及び、世上には自害の跡をみせて、時を待て運をひらき、父が名を天下に再顯べし。始をよくする者はあれども、終を守る者稀也。天下を知べきものは源氏の輩たるべし。木曾義仲は不徳不明の者也。一旦事を得たりと云とも、終久かるべからず。頼朝は強敵たるべし。されども彼必後に驕生ずべし。時に臨で義兵を挙よ。是は是兵法の深意たり。此巻をもつて兵道の自在を悟れとて、一卷の書を傳られけり。時に重景を召て仰られける事は、汝が父景康より、代々相傳の忠士たり。殊に汝千万人秀て忠勇尤他異也。天下の始終今吾鑑処。少も違べからず。殊に汝は惟盛と同年にして、未若年也。存あらば必時に應ずべし。偏に草

のかけにても、汝を頼のたまひと宣のたまひて、重代の御劔けんを下されけると云々。是によつて熊野山中に落忍おちしのひ給たまひて、世上には自害の躰ていにもてなし給と云々。殊に瀧口は、小松殿の御恩深蒙こつりたる者也。故に良将は、三世を鑑かんがみ、いかなる山中の者、又は賤いやしき隠者等にも、義恩を施ほどこし置おき、終ついの大事を計はかると見えたり。

やや引用が長くなつたが、右の別伝には重要な点が二点ある。維盛生存説を記していること、及び、それを重盛の計略としてゐることである。維盛の父、重盛は平家一門の衰運を予見し、子息に一つの計略を授ける。傍線部にあるように、熊野の山中にあらかじめ隠れ家が用意してあるので、自害をしたように見せかけてそこに隠れよ、そして平家再興の時節を待てというもので、維盛はその父の言葉に従つたという。ここでは、維盛の入水は父重盛が生前から仕組んでおいた計略だったのである。

これは明らかに、世上に流布してゐた維盛生存説を補強し、拡大したものと見てよい。引用部分の最後で、重盛が「義恩」を施しておいたことが、後に役立つたという記事が見えるが、これは『義経千本桜』において、弥左衛門が重盛から受けた恩義のために、維盛を救つたという内容に反映している。

『義経千本桜』では、弥左衛門は重盛が唐土の「硫黄山」に三千両の祠堂金を渡そうとした時の船頭で、その三千両を分け取りにしたのに、重盛は罪に問わなかつたという。これは明らかに『平家物語』卷三「金渡」を意識した設定であるが、『平家物語』の「育王山」が『義経千本桜』では「硫黄山」に改められ、虚構の設定になつてゐる。弥左衛門はその恩を今に忘れていないのである。新日本古典文学大系『竹田出雲／並木宗輔浄瑠璃集』によれば、この箇所はのちに改刻され、「分け取り」が「盗み取られ」に改められているといふ<sup>14</sup>。また、類似するの設定が享保十五年（一七三〇）

の『蒲冠者藤戸合戦』（並木宗輔・安田蛙文作）に見えるという。同書は以下のように記している。

平家の侍小胡麻の郡司と伊賀の平内左衛門が、重盛の命により資堂金三千両を唐土背王山へ運ぶ際に悪心が兆し、三千両のうちの千両を書類をごまかし、二人で五百両づつ分け取りした。重盛は二人を見逃したが、二人は良心の呵責に苦しみ、罪滅ぼしにと重盛の死後、維盛・六代のために命がけで尽す。義経千本桜では、作者は自身の旧作から設定・文章の一部をそっくりとり入れながら、弥左衛門をもと平家の侍とせず、船頭としたところが、二段目切と一貫する平家物語の本文に則った脚色態度である。<sup>(15)</sup>

『義経千本桜』は従って、旧作『蒲冠者藤戸合戦』の設定を引き継ぎながら、平維盛生存説に結び付けているのだが、弥左衛門を平家の侍でなくただの船頭としているのは、さきの『秘伝抄』の「いかなる山中の者、または隠者等にも、義恩を施し」という表現に合致している。弥左衛門が維盛を救ったのは、たとえ武士ではない身分の低い者でも、恩義を与えておけば将来役に立つことがあるという、まさにその具体的な反映になっている。また、維盛を熊野での入水から救うという設定も『秘伝抄』を参考にしたものとおぼしい。

また、ここで注意しておく必要があるのは、自害した振りをして密かに生き延びるといふ計略が重盛によって示されていることである。それは、平家の衰運の予見に端を發しており、その先見性が強調されている。この重盛像は、覚一本『平家物語』卷三「無文」に、「不思議の人に、未来のことをかねてさとり給ひけるにや」とあるような、「一門の運命」を予見する能力を拡大したものだ。『義経千本桜』では維盛の計略が父によるものとはしていない（計略であるかも明



瞭に示されない)が、先に記したように、重盛の恩を受けた者によって維盛が救われるという設定は『秘伝抄』を経由して、『義経千本桜』に反映しているのである。

## 二 知盛・教経をめぐる

それでは、次に『義経千本桜』の知盛・教経像はどのようなようにして形成されたのであろうか。まず、知盛であるが、都を落ちて九州に逃れようとした義経主従の乗る船に、知盛の亡霊が現れるという設定は、能『船弁慶』を典拠としている。『義経千本桜』本文にも「あら珍しやかに義経」という謡曲の詞章が引用されており、その影響は色濃い。しかし、能では死霊となって現れている知盛が、ここでは生き残っている実在の知盛であるところに大きな違いがあり、その後には死んだと見せかけて平家の再興を目指す「計略」がある。

一方、教経については『平家物語』では壇ノ浦合戦で華々しい活躍をした後に、源氏の武士二人を道連れにして入水している。『義経千本桜』では、教経もまた入水したと見せかけて生き延びるのであるが、教経を生き延びさせたのは屋島合戦で兄継信を教経に射殺された佐藤忠信が、兄の敵を打つという設定とも結び付いており、優れた演劇的構成といえよう。この知盛・教経の二人について、『秘伝抄』巻十一下「能登殿最期」には以下のような記事が見える。

評曰、勇有て智なきをば偏勇へんとし、智有て勇なきをば偏智へんとすべし。勇智等ひとをもつて大将とす。然るに能登殿のさいごの働はたら、勇は甚勝はたたりといへ共、智は由来おには劣給おへり。天下国家に大将たるべき人の心得にはあらず。故に智不足の働はたらと云へき乎。然ども平氏の一門のうちにて勇智をくらべみる時は、勇は教経をもつて第一とし、智は

知盛をもつて第一とすべし。されども人の行迹かたせき、大道にくらへみて、道理に達せざる時は、皆誤あやまりと謂べし。若其智ふかくして、勇徳ひとしま等時は、此時まで此所に、角てはおはしますべからず。是たゞ其智不足故成べし。然といへ共、最後の働はたらきに、義経を目がけ給ふ事、是勇の勇たるものとすべし。然ども安藝太郎兄弟の者どもを、両の脇はきみに扶、海に沈給ふ事は、事過たるふるまひたり。一方の大将のなすべき業にはあらず。縦たどむ自害をなし給ふといふとも、いかにもひそかにして、敵に最後か最後にてあらざるかを疑うたがしむべきもの也。天下にはいかなる志の者や有なん。されば古功有大将は、自害をしけれども、死せざるがごとくにし或は死せざれども、死したるがごとくにみせたり。故に落行たる陣場じんばに、首を求て面の皮を剥ぎ、捨行事などするもの也。此志臆病にして、其所を逃去にはあらざれども、只大功を存が故也。故に慎で大将の威神妙の道有事を学し給へ。

右は壇ノ浦合戦で、教経が入水して自害した場面の評である。前半の傍線部に見えるように、『秘伝抄』の作者は、平家の武将の中でも知盛と教経の二人を特に高く評価している。また、後半の傍線部においては、先の維盛に関する記述と同様に、ここでも敵に死を悟られないこと、あるいは死んだ振りをして生き延びることを勧めている。『義経千本桜』における「計略として生き延びた」知盛・教経像はこのような思想を母体としている。『秘伝抄』の観点に拠れば、二人が密かに生き延びたのは、優れた武将としてふさわしい行動だったといえよう。また、右には戦場を逃げ去るときに面の皮を剥いだ贗首をその場に残すことによつて、死んだと見せかけるといふ記事が見えて興味深い。このような贗首への関心もまた、後述するように『義経千本桜』に結び付いている。さらに『秘伝抄』巻十一「内侍所都入」にも、以下のような記事が見える。

知盛のさいご勇智有。敵如何して此時までは手延になしおきけん。此度平家の合戦に、知盛教経兩人の有様にて、せめて平氏の恥をきよむる、ことはの種とも成べし。されども此人々、さいなき大将なれば、良將の相兒曾てなし。水に入給ふ事は、女の自害に似たれ共、敵に首をとられ、獄門にかけられ、世上に面をさらさんよりは、是宜しかるべき乎。

ここでは、知盛が入水したことが、敵に首を取られるよりはまだ、よかつたという。それは、明確な証拠を残さない死であり、そこに生存説が作られる「隙間」が生じているといえよう。このようにして『秘伝抄』は、知盛・教経の二人が首を取られなかったことを高く評価しており、そのような評価は『義経千本桜』の内容に結び付いている。『義経千本桜』「堀川御所の段」では、堀川御所の義経のもとに、鎌倉から川越太郎が詮議に来る。川越は義経に対して、平家の武將の首のうち、知盛・維盛・教経の三人の首が贖首であったことを問い質す。それに対して義経は以下のように答えている。

「其二云訊いと安し。贖首を以て真とし。実を以て贖とするは軍慮の奥義。平家は廿四年の栄花。亡び失ても旧臣倍臣国々へ分散し。赤旗のへんぼんする時を待ツ。一門の中にも三位中將維盛は。小松の嫡子で平家の嫡流。殊に親重盛仁を以て人を懐。厚恩の者其数をしらず。維盛ながらへ有としらば残党再び取立るは治定。又信中納言知盛。能登守教経は古今独歩のゑせ者。大将の器量有と招きに従ひ馳集る者多からん。さすれば天下穩ならず。何れも

入水討死と世上の風聞幸に。一門残らず討取しと。膺首を以て欺しは。一旦天下をせいひつさせん義経が計略。」

右には重盛が仁を施したためにその恩義を感じる者が多いことが見え、また、知盛・教経を「古今独歩のゑせ者」としている。これらは、『秘伝抄』の内容と重なり合う記述である。また、義経は三人が入水と見せかけて生き延び、平家の残党を再結集しようとする計略を見抜いており、三人の膺首を用いて天下を静まらせようという計略でもって対抗しようとしている。その間も義経は、郎等を諸国に派遣して三人の行方を追っているのである。つまりこれら三人の武将がいずれも入水によって死んでいるという『平家物語』の記述から、「首がない」という事実が引き出されて『義経千本桜』に反映しているのだが、そのような首へのこだわりは『秘伝抄』の記述を参考にしていると考えると、実に理解しやすい。このように見ていくと、『秘伝抄』に見える名将観、すなわち、死んだと見せかけて敵を欺く計略や、敵に首を取られないことを理想とする死に方の影響が、『義経千本桜』の内容に色濃く反映していることがわかる。こうして、『秘伝抄』によって方向付けられた『平家物語』の解釈に、浄瑠璃作者が従っているのである。

このように『義経千本桜』は『平家物語』や『義経記』の内容を踏まえているだけでなく、それらを評釈した書物をも参照している。それは、軍記物語には記されることのなかった「あるべき世界」あるいは「ありえた世界」への想像力と結びつくものであった。もし、維盛・知盛・教経がすぐれた武将であったならば、入水はせずに生き延びたであろう、という評価は、三人が生き延びた世界を描くという興味へと結びついている。そこに、『義経千本桜』の世界が形成される条件が存在しているのである。

## おわりに

以上に見てきたことを簡略にまとめると、以下のようになる。『義経千本桜』は、平知盛・維盛・教経の三人の武将が、壇ノ浦合戦後も生き延びたという設定を有している。そのうち、維盛については、早く中世から生存説があるが、父重盛の恩を受けた者によって熊野から救われるという設定は『秘伝抄』の内容にごく近似している。

さらに、『秘伝抄』が優れた武将の行動として説く「自害を装って生き延びる」という計略が、知盛や教経の場合にも当てはまる。また、このような計略は、入水による自害では敵に首を取られないという条件によって補強されており、そのような首を取られていないことへのこだわりも、『義経千本桜』の内容に反映している。

以上から判断して、『義経千本桜』は『秘伝抄』の示す合戦観や別伝の影響下に作られたと考えられる。このような形で、軍記評判は浄瑠璃作者によって利用されていた。ここで、『秘伝抄』に先行し、その内容に影響を与えていると考えられる軍記評釈『太平記評判秘伝理尽抄』<sup>(16)</sup>(以下『理尽抄』)との関係にも言及しておきたい。合戦において、自害を装って生き延びるといふ計略は、『理尽抄』巻三「赤坂城軍事」において、楠木正成を描いた以下の記事が注目される。

正成自害の真似<sup>まね</sup>をして、城を落たる謀、書に顕然<sup>けんぜん</sup>たり。大公が秘術も是には過ぐべからず。生得<sup>しやうとく</sup>の智謀、古今<sup>まいに</sup>に希なる所也<sup>し</sup>。

右は、楠木正成が自害を装って赤坂城を落ち延びた場面の評であり、『理尽抄』はそれを太公望の秘術にも勝る「生

得の智謀」と絶賛している。そのような『理尽抄』の正成に対する評価を『秘伝抄』は、形を変えて拡大し、引き継いでいるといつてよい。

『理尽抄』については、早く今尾哲也氏が『仮名手本忠臣蔵』との関係を指摘している。今尾氏は、赤穂事件の巷説を検証し、「物欲の権化」と見なされていた吉良の心象が『理尽抄』を介して普遍化された師直についての心象と共鳴して、両者は、一つの人格に複合されて行つた」と指摘している。<sup>18)</sup>このような、軍記評釈と浄瑠璃の間の緊密な関係を認めるならば、『秘伝抄』の示す世界観もまた、浄瑠璃世界に色濃く影を落としていたとしても不思議ではない。

浄瑠璃作者が『平家物語』や『太平記』などの軍記物語を利用する際には、様々な評釈類をも含む多様な文献を参照していたものと思われる。『秘伝抄』と浄瑠璃作品の関係については、なお検討されるべき課題が多いといえよう。

#### 注

- (1) 原道生「『実は』の作劇法」(上・下)、『文学』昭和五十三年八月、十月
- (2) このほか『源平盛衰記』は、『禪中記』に見える異説として、維盛が熊野では入水せず、相模の国湯の下で入滅したとも記している。
- (3) 『太平記』本文は後藤丹治・釜田喜三郎校注、日本古典文学大系『太平記』(一)(岩波書店、昭和三十五年)による。
- (4) なお、十津川村は明治維新後の廃仏毀釈運動によって村内の全ての寺が破却されたため、この寺も現存しない。
- (5) 鈴木宗朔「紀州における近世の維盛伝説」(『軍記と語り物』三十四号、平成十年三月)
- (6) 鈴木、前掲註(5)
- (7) このほか『参考源平盛衰記』も「熊野人口碑」に拠るとして、「小松弥助」の名を記している。日本古典文学大系『太平記』(前掲註(2))に指摘がある。

- (8) 森田みちる「義経千本桜」の成立をめぐる」に指摘がある。
- (9) 真田増登編による伝記。正編二十五卷、続編十五卷。元禄年間の編か。「諸記等二洩ル所ノ実談等ノ見聞」を集めたといふ。(朝倉治彦「明良洪範」『日本古典文学大辞典』岩波書店、平成二年)
- (10) 鈴木、前掲註(5)
- (11) 堀竹忠晃「『平家物語』の受容と変容——『平家物語評判秘伝抄』「伝」の部を中心として——」(『論究日本文学』六十四号、平成八年五月)
- (12) 杉本圭三郎『日本古典文学大辞典』
- (13) 以下、『秘伝抄』の本文は慶応義塾図書館蔵の慶安三年板により、私に句読点を施した。
- (14) 角田一郎・内山美樹子校注『竹田出雲ノ並木宗輔浄瑠璃集』(新日本古典文学大系九三、岩波書店、平成三年)によれば、吉野の釣瓶鮓屋から仙洞御所への献上が、寛延元年(一七四八)に復活したのを受けての改変ではないか、という。(四七九ページ脚注)
- (15) 前掲註(14)、四七八ページ脚注
- (16) 全四十巻。大運院陽翁編、元和八年(一六二二)奥書。所謂「太平記読み」と称される。講釈師の種本とされる。
- (17) 本文は『太平記秘伝理尽抄』1(平凡社東洋文庫、平成十四年)に拠った。
- (18) 今尾哲也「『太平記』と『忠臣蔵』——世界の形成についての覚え書き(上・下)——」(『文学』五十五巻四号、九号、昭和六十二年四月、九月)